



TITLE:

ネットワークのなかの港町とそこ
における所謂「バニヤン」商人：一
九世紀ザンジバルにおけるカッチ
ー・バティヤー商人の活動

AUTHOR(S):

鈴木, 英明

CITATION:

鈴木, 英明. ネットワークのなかの港町とそこにおける所謂「バニヤン」商人：一九世紀ザンジバルにおけるカッチー・バティヤー商人の活動. 東洋史研究 2013, 71(4): 794-766

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/210162>

RIGHT:

ネットワークのなかの港町と そこにおける所謂「バニヤン」商人

——19世紀ザンジバルにおけるカッチー・バティヤー商人の活動——

鈴木 英 明

は じ め に

I カッチー・バティヤーの概要とインド洋西海域への進出

II アフリカ大陸東部沿岸におけるカッチー・バティヤーたちの活動

—ジェイラム・シヴジー, イヴジー・シヴジー, ラダー・ダームジー—

1. 徴 税 請 負 職

2. 仲 介 業 務

3. 金 融 業

4. 農 園 経 営

III ま と め

は じ め に

本稿は、19世紀ザンジバルにおけるカッチー・バティヤー Kachchhī Bhatiyā 商人の活動に焦点を当てることで、従来のインド洋海域史研究で十分に具体的な考察がなされてこなかった2つの重要な問題に取り組むものである。

ひとつ目の問題は、ネットワーク論を念頭に置いた場合の港町の機能に関連している。ここでいうネットワーク論とは、社会学や人類学で議論されてきた社会的ネットワーク論を指すが、これを基礎にすることで、歴史学においても、複数の主体や場のあいだを移動したり、それらのあいだで交換される事物（ヒト・モノ・カネ・情報）に着目することで、広域に分散する多様な主体や場を一連の関係性のもとに見渡す試みが行われてきた。このネットワーク論を用いることで従来、「中東」、「インド」、「アフリカ」、「東南アジア」などと切り分け

て理解されてきた諸地域を「インド洋海域世界」という概念のもとにつなぎ合わせてきた家島彦一は、港町を「海域世界全体の結節点」,「ネットワーク・センター」,「情報センター」として位置づける⁽¹⁾。本稿は、港町に関するこの家島の見解と基本的に立場を同じくする。ただし、この見解に従った場合、次の問題が想起される。すなわち、港町という場においてヒト・モノ・情報・カネの無数の流れが交錯するとすれば、それらの流れはどのようにそこで集積・交換されたのだろうか。たとえば海禁や朝貢、互市といったシステムがしばしば見られた東アジア海域とは大きく異なり、とりわけ、インド洋西海域（おおよそアフリカ大陸東部沿岸からインド亜大陸西岸まで）においては、それらの流れが政治的な統制を受けることはそれほど多くなかった。それ故に、それらの流れが港町という場に無秩序に流入することすら想定しうる。したがって、この海域の港町でのヒト・モノ・情報・カネの集積・交換は、一種の混沌と化する可能性を常に内包している。逆に、港町がそれらの集積・交換を円滑に、かつ効率的に実行することができれば、ネットワークにおける結節点としてのその港町の重要性は増加し、これは港町自体が発達するひとつの重要な要因となりうる。港町がネットワークの結節点を形成するという点ではどの港町も同じであるが、集積・交換の仕組みは必ずしも同じとは限らない。むしろ、それぞれの港町では集積・交換について、類似点を見出すことはできても、基本的にはそれぞれの論理のもとに行われていたと想定したほうが良いと思われる。以上を踏まえれば、各港町がいかなる仕組みでそこで交錯する無数のヒト・モノ・情報・カネの流れを集積・交換していたのかについて、具体的な実態を明らかにすることは、ネットワーク論に即して個々の港町を捉えようとする場合に重要な作業であると同時に、ネットワーク全体を考える際にも不可避の問題であるといえよう。先行研究では、たとえば、東アジアの幾つかの事例について、政治権力による管理の実態が明らかにされてきたし、東南アジアの港市国家に関する議論も広く知られている⁽²⁾。しかし、インド洋西海域の特に18世紀半ば以

(1) 家島 1996, 134. また、家島 2006, 77-79も参照せよ。

(2) 東・東南アジアに関する先行研究の動向を掴む上では、桃木（編）2008, 168-180が有用である。また、弘末 2004は、東南アジアの港市論に関して参照すべき

降については、そうした問題を想起した場合に参照すべき具体的な研究の蓄積が未だに乏しい。

インド洋西海域のこうした研究状況について、それがなぜ生じたのかを考えると、インド洋を一体の歴史世界として捉えようとする先行研究のあいだで、この海域世界の崩壊が18世紀の中葉を境に本格化したという歴史観が共有され、それ以降の時代が主たる考察対象になってこなかったことがその理由の一端として挙げられる。しかし、近年ではこうした見解は理論的にも、実証的にも大きく見直されており、むしろ、この海域世界の変容を伴う持続性に注目が集まっている⁽³⁾。こうした研究の流れを踏まえれば、18世紀半ば以降の時期を対象に、ネットワークの結節点としてインド洋西海域の港町をとらえる具体的な研究には、より一層の重要性が認められるべきだろう。

もうひとつの問題は「バニヤン」商人に関係する。インド洋西海域の港町に関する欧語文献を読み進めていくと、「バニヤン Banyan, Banian」と呼ばれる商人たちが頻繁に言及されていることに気付かされる。狭義のバニヤンはグジャラートを主たる出身地とし、商業を主たる生業とする職能集団ヴァニヤー⁽⁴⁾を指すが、欧語文献に現れる「バニヤン」は、ヴァニヤーに限定されるというよりも、非イスラーム教徒であるヒンドゥー教徒やジャイナ教徒の商人一般を指す場合が多く、イスラーム教徒の一部も含んで定義される場合すらある。たとえば、1870年代初頭にザンジバルを中心とする東アフリカ沿岸部一帯の奴隷制廃止を目的として行われたフレレー B. Frere 調査団の報告書のなかに次のような言及がある。

バニヤンとして一般的に知られるインド商人たちは幾つかのカーストと階級に分かれている。商人カーストのさまざまな分派のヒンドゥー教徒たち

である。最近の研究としては、Hall (ed.) 2008; Haneda (ed.) 2009 を参照せよ。また、港町について、そこにみえる人的結合に着目した論文集である歴史学研究会(編) 2006 も参照せよ。

(3) インド洋海域史研究の動向については、鈴木 2010, 8-16 を参照せよ。

(4) ヴァニヤーについては、Enthoven 1922, vol.3, 412-442; ピアスン 1984, 42-43 を参照せよ。

(狭義のバニヤン Bannians proper, つまり, ヴァニヤー Waniyas, パティヤー Battias, ロハナ Lowanas など) もいれば, より正統的なイスラーム教徒から見れば異端視されるイスラーム教徒の幾つかの分派 (ボハラ Borahs, ホージャ Khojas, メモン Mehmons など) も含まれる。こうした異端のイスラーム教徒たちは, そもそもヒンドゥー教徒であった彼らの祖先がイスラーム教徒に改宗したのちも, 多くの古いヒンドゥーのカーストの習慣を保っていたことから生じた伝統として考えられる幾つかの儀礼や特徴を有している⁽⁵⁾。

こうした言及も考慮に入れば, 「バニヤン」商人とは, 端的に言えば, 極めて曖昧に「非イスラーム教徒」を中心とした商人たちを包含する概念であり, 本来的にこの概念を定義するものは, そこに包摂される人々の内的な連帯意識なのではなく, 外部者の視点である⁽⁶⁾。また, 概念の曖昧さによって, ある文献が「バニヤン」商人として具体的に指し示している人々と別の文献のそれとが同じである確証はどこにもない。それ故に, 文献で「バニヤン」商人として登場する人々を一括して論じることは, そこに包含される内的な多様性を捨象することにも, そして, 本来あるだろうはずの「バニヤン」商人に含まれる人びととそこに含まれない人々とのあいだに見られる連続性や同質性を無視してしまう危険を常にはらんでいるのである。もちろん, 資料上の制約からこうした問題に取り組むのがきわめて難しい場合も多い。

しかしながら, たとえば, オルパーズ E. A. Alpers が19世紀初頭のポルトガル領モザンビークにおけるヴァニヤーの凋落を明らかにしているように⁽⁷⁾, 本稿の対象とする19世紀をやや遡る頃からは資料上の制約がかなり緩められ,

(5) NAUK FO84/1386/73-74 (Memorandum on connection of British subjects with East African Slave Trade, B. Frere, 26 August 1872).

(6) Yule and Burnell 1886, 63-64, s.v. Banyan を参照せよ。インド洋西海域に関する19世紀の文献での「バニヤン」の用法の混同については, Reda Bhacker 1992, 69 に詳しい。「バニヤン」として括られる人々の多様性については, Markovits 2008, 194; Mehta 1991, 35-36; Nicolini 2004, 38-39 も指摘する。

(7) Alpers 2009, 3-22.

特定のコミュニティーを継続的に同時代資料から追えるようになる。彼らにかわって19世紀に入ると、インド洋西海域の港町での商業活動において、宗教を問わず、カッチ地方出身の人々が急速に台頭していった。たとえば、19世紀後半に、宣教師としてザンジバルに長期に亘って滞在したスティール E. Steere のスワヒリ語・英語辞典では、「バニヤニ *banyani*」(「バニヤン」のスワヒリ語転訛形)が「カッチ地方から商人としてやってきた異教徒(ここでは、非イスラーム教徒を意味する)のインド人に対する一般的な名称としてザンジバルで用いられる⁽⁸⁾」と説明されている。本稿が焦点をあわせるのは、カッチ地方の「バニヤン」のなかでも、オマーンやアフリカ大陸東部沿岸でひときわ目立つ活躍をしたカッチー・バティヤーである。

以上の2つの問題群—ネットワークの結節点としての港町の実態と「バニヤン」商人の具体像—は、19世紀のザンジバルで合流する。つまり、19世紀ザンジバルにおいては、カッチー・バティヤーの当地での具体的な商業活動を解明することは、曖昧な概念である「バニヤン」商人という存在の具体的な姿を描くことにも、この港町のネットワークの結節点としての姿を描写することにもつながるのである。そこで、以下では、まず、カッチー・バティヤーに関する19世紀までの歴史を通観し、そのうえで、19世紀のアフリカ大陸東部沿岸におけるこの集団の代表的な人物であるジェイラム・シヴジー *Jeiram Shivjī*、イヴジー・シヴジー *Ivjī Shivjī*、ラダー・ダムジー *Ladhā Dāmjī* の3人のカッチー・バティヤーの活動を検討することで、「バニヤン」商人の具体的な商業活動の在り方を明らかにする。なお、本稿では、各地の文書館資料をはじめとする文字記録に加えて、筆者が2004年から行っているカッチ地方、アフリカ大陸東岸、ペルシア湾岸などでの現地調査から得られた知見も用いる。

(8) Steere 1930, 253, s.v. *Banyani*. また、この辞書に大きく依拠して編纂された Madan 1903, 22–23, s.v. *Baniani*, *Banyani* も参照せよ。

I カッチー・バティヤーの概要とインド洋西海域への進出

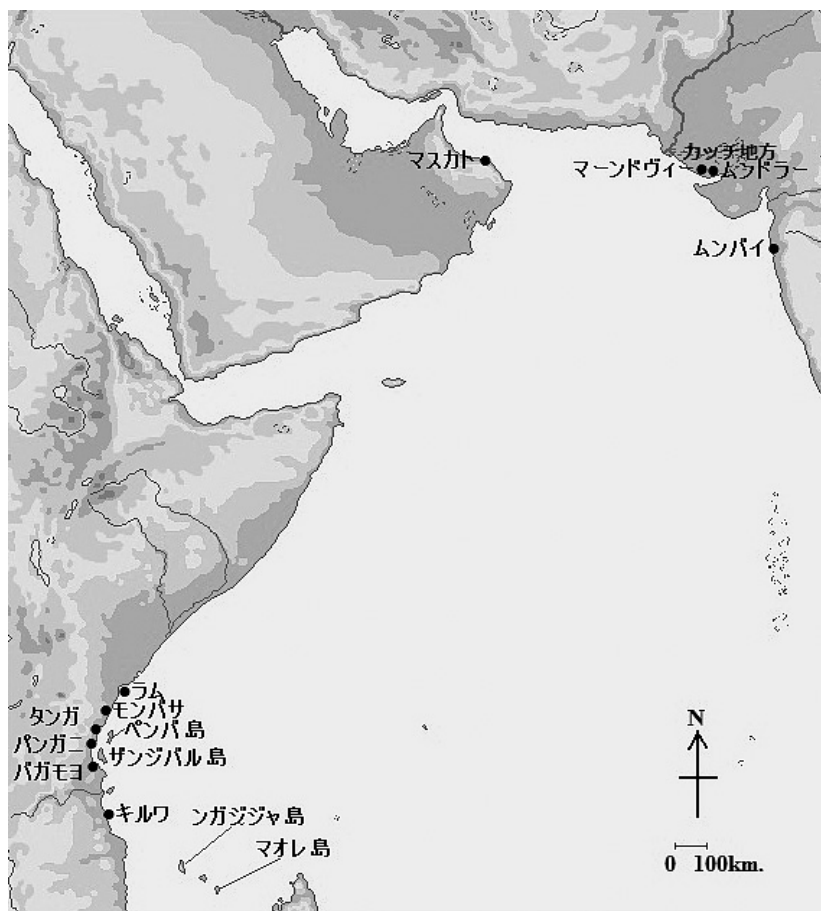
インド政庁によって作成された1880年代のカッチ地方に関する地誌を参照すると、当時、この地方に約2万人のカッチー・バティヤーが住んでいた⁽⁹⁾。彼らはラージプートであり、そのほとんどがクリシュナ神を信仰するヴァイシュナーヴ派のヒンドゥー教徒である。現在では、カッチ地方はもとより、インドのムンバイや、ケニア、タンザニア、オマーン、アラブ首長国連邦、さらには、イギリス、アメリカ、カナダなどの欧米諸国にも多くが居住している⁽¹⁰⁾。彼らの起源は、文献資料にはほとんど遺されていないが、口頭伝承を辿れば、パンジャーブ地方やラージャスターン地方に求められ、これが、現在、カッチー・バティヤーたちのあいだのみならず、研究者間でも通説になっている⁽¹¹⁾。筆者による2005年から2006年にかけて実施した聞き取り調査⁽¹²⁾では、ラージャスターン地方のジャイサルメールからカッチ地方に移住した経緯は次のとおりである。すなわち、彼らは農業を中心に、商売や金融業なども営んでいたが、あ

(9) Campbell (ed.) 1880, 53. また、1901年のボンベイ管区には、2万8千人強のバティヤーが居住していたとされる (Enthoven 1922, vol.1, 133)。

(10) Koga (ed.) 1991, 58, 126-127; 鈴木 2008b, 21-25.

(11) Elliot 1966, vol.2, 30, 440; Enthoven 1922, vol.1, 134-135; Salvadori 1989, 97; Swali 2003, 2.

(12) Interview with Navin Svālī, Parmanand Bhajariā. 前者は、後述するイヴジー・シヴジーの玄孫に当たる人物で、ムンドラーに生まれたが、のちにザンジバルに渡り、商店を経営した。ザンジバル革命(1964年)を機にムンドラーに戻ってきて以来、アフリカ大陸東部沿岸には渡航していないが、現在でも、英語は勿論、スワヒリ語も堪能で、父や祖父から聞いたとするバティヤーについての歴史や、ザンジバル在住時の町の様子を詳細に語る。後者の曾祖父は、カッチ地方からマスカトに渡り、一家はその後、オマーンに拠点を築いた。彼自身もバルカーで生まれ、現在は息子に店舗を譲っている。数年前に別のバティヤーからムンドラーの家屋を買取り、オマーンの夏季のあいだはカッチ地方で過ごしている。前者には、2005年から2006年にかけて、後者については2006年にそれぞれ複数回、聞き取りを行った。彼らの家系を含むカッチ地方に在住の数家族の家系図については、鈴木 2008b を参照せよ。なお、筆者のカッチー・バティヤーへの聞き取り調査は、深見奈緒子早稲田大学准教授、山根周関西大学准教授らが組織した2001年グジャラート大地震からの復興プロジェクトである「プロジェクト・グジャラート」の活動の一環として行われた。



地図1 インド洋西海域（筆者作成）

る時期、盗賊が跋扈するようになっていた。住民がそれに困惑していたところ、カッチ地方の支配者ラーオ Rão が彼らのもとを訪れ、彼らのことを気に入り、自らの領域へと招いたという。情報提供者は移住の時期がいつなのかを明言しなかったが、おそらく、この話は、12世紀頃にムスリムの襲撃によって、ジャイサルメールから離散していったとするパティヤー全体が共有する移住伝承⁽¹³⁾

(13) Enthoven 1922, vol.1, 135; Salvadori 1989, 97.

の一変形であると考えられる。実際に、たとえば、19世紀後半の時点では、バティヤーの存在はカッチ地方のみならず、カーティヤーヴァード地方、スインド地方、ラージャスターン地方など広範囲に亘って確認されており、そのなかには例外的に魚肉食や飲酒の慣習を持つ者も含まれている⁽¹⁴⁾。長い時間をかけた広範囲に跨る離散の過程で、バティヤーは単一集団としての統一性を失っていった。その結果として、たとえば、筆者のムンバイやカッチ地方におけるバティヤーたちに対する聞きとりによれば、すべての情報提供者はバティヤーを一括して認識するのではなく、それぞれの出身地ごとに区別して認識している⁽¹⁵⁾。カッチー・バティヤーは、こうした離散の歴史を持つバティヤーの一系統になる。

カッチー・バティヤーがカッチ地方に到来・定着した時期について、正確な情報を得ることは難しいが、19世紀を通してインド洋西海域の港町で、彼らの商業活動が大きな成功を収めるようになっていったのは後述するとおりである。彼らが積極的にカッチ地方以外に商機を求めていった理由としては、19世紀のこの地方で相次いだ地震などの天災と18世紀末からの政治的な混乱が挙げられる。カッチ地方は地震に見舞われることが多く、19世紀だけでも、1819、44、45、64年に大きな被害を残す地震が記録されている⁽¹⁶⁾。また、この地域はランと呼ばれる湿原に囲まれ、地下水に塩分が多く含まれていることから、農業用水を天水に頼らざるを得ないうえに、旱魃にもたびたび見舞われた。さらに、イナゴの大量発生による被害や獣害も深刻で、19世紀のカッチ地方に関する地誌には、1803、13、15、26、34、39、41、42、46、49、58、61、62-77年にそ

(14) Enthoven 1922, vol.1, 135; McMurdo 2007, 33.

(15) Interview with Navin Svālī, Parmanand Bhajariā, Kiran Bhatiyā. 最後の人物は、調査時にムンバイに在住の50歳代半ばの人物で、自らの祖先はカーティヤーヴァード地方の出身であると称する。彼もまた、バティヤーの歴史について知識が豊富であり、現在は出身地とは疎遠であるが、ムンバイのバティヤーたちについてはその動向をよく知る人物である。彼からは、2003年から2006年にかけて複数回、聞き取りを行ったが、2012年に死去した。

また、バティヤー内部の区分については、Enthoven 1922, vol.1, 136-138 も参照せよ。

(16) Campbell (ed.) *Gazetteer*, 16-17.

うした原因による飢饉が記録されている⁽¹⁷⁾。また、政治的には、1778年から1786年までラーオに在位したラーヤダン二世 Rāyadhan II がヒンドゥー教寺院を破壊するなどの行為を繰り返して以降、カッチ地方が政治的に混乱し、反ラーヤダン二世勢力による事態の收拾が画策されるなかで、イギリス東インド会社に応援が要請された⁽¹⁸⁾。これを契機として、この地方にイギリス側の影響が及び始める。その後、ラーオとイギリス東インド会社とのあいだの数度にわたる交戦を経て、1816年にはラーオがイギリス東インド会社の保護下に入ることを主旨とする条約が締結される⁽¹⁹⁾。このように自然環境や政治情勢がきわめて不安定な一方で、海港を通じた交易活動は活発に行われていたようであり、19世紀初頭の幾つかのマーンドヴィーに関する記録からは活発な交易活動が読み取れる⁽²⁰⁾。たとえば、ボンベイ政庁の技師リーチ E. Reech の1837年の報告によれば、マーンドヴィーとムンドラーの2つの港湾の収入はマリア・テレージア・ターレル (MT\$) 換算で約13.1-13.8万 MT\$ であり、これは1834年のザンジバルの関税収入約15万 MT\$ を若干下回るにすぎない⁽²¹⁾。

筆者のカッチー・バティヤーの情報提供者たちは揃って、彼らは本来、海を渡ることをコミュニティの決まりによって禁じられていたと述べる。聞き取りからは、そうした禁がいつ、どのようにして解かれたのかを明らかにできないが、上記のカッチ地方の状況は、彼らが新たな場所へ商機を求める契機になったと考えられる。インド亜大陸以外でカッチー・バティヤーがもっとも早く商業的な成功をおさめた場所とされているのが、マスカトである。アレン C. H. Allen の研究によれば、17世紀以来、タッタを中心とするスィンド地方のバティヤー (スィンディー・バティヤー) たちがマスカトで商業活動を展開していたが、18世紀最末期から19世紀の第1四半世紀までのあいだに、カッチー・

(17) *Ibidem*, 107-109. また、Postans 1839, 245-246 も参照せよ。

(18) Burnes 2004, 7-16; Campbell (ed.) 1880, 151, 153, 265-266.

(19) Burnes 2004, 7-42; Campbell (ed.) 1880, 148-159. また、この間の政治的な動向については、Dulerāy Kārānī 1990, vol.2, 428-511 も参照せよ。

(20) McMurdo 1820, 217-218; 鈴木 2008b.

(21) 鈴木 2008a.

バティヤーが彼らを凌ぐ存在となっていた⁽²²⁾。スィンディー・バティヤー自体の商業的な没落とともに、その理由としてアレンが挙げるのは、次の2点である。すなわち、ひとつは、スィンディー・バティヤーのようにマスカトに商業基盤を持っていなかった新興のカッチー・バティヤーが為政者との交易を重視した点と、もうひとつは、彼らが、カッチ地方の港を介して、マスカトで獲得したデーツや犀角、象牙、奴隷などを売りさばけるボンベイ（ムンバイ）などの大きな市場と繋がっていた点である⁽²³⁾。こうした事情のもと、マスカトにおいて為政者との紐帯を強めながら、徐々に商業的に優位に立つようになっていったカッチー・バティヤーたちは、マスカトのスルターンがザンジバルに拠点を築いていくのと同進行で、この島を中心にアフリカ大陸東部沿岸での活動を本格化させていった⁽²⁴⁾。1859年から1866年までアフリカ大陸東部沿岸の幾つかの港町に居住した匿名のバティヤーによって提供された情報を参照すると、この時期、およそ700人程度がアフリカ大陸東部沿岸及びその近隣島嶼で活躍していた⁽²⁵⁾。

(22) Allen 1978, 100-109. また、Nicolini 2004, 36 で言及されているラージャスターン出身のバティヤーが19世紀のマスカトにいたという事実は、管見によるところの同時代文献からは確認されなかった。おそらく、ニコリーニはマスカトのスィンディーないしはカッチー・バティヤーについて、彼らの伝承上の故郷を出身地と取り違えていると考えられる。

(23) Allen 1978, 107-109.

(24) 先行研究は、商人の側がサイドにザンジバル遷都を進言したのか、その逆なのかで見解が二分されている。Coupland 1967, 44; Nicolini 2004, 36; Wilkinson 1987, 64 はサイドがザンジバルへの遷都に際して、マスカトのインド系商人たちに移住を奨励したことを強調する。ただし、一方で、シェリフ A. Sheriff はインド系商人の側がサイドにザンジバルへの遷都を進言したとする説を述べており（Allen 1978, 133, n.41）、Reda Bhacker 1992, 71 も自身の聞き取りなどをもとにしてこの説に同調する。

(25) NAUK FO881/2314/14 [Memorandum on the connexion of Indian Traders on the Eastern Coast of Africa with the Slave Trade, by Kazi Shahabudin, Dewan of the Rao of Kutch, dated 84, Jermyn Street, London, 14th February 1870].

Ⅱ アフリカ大陸東部沿岸におけるカッチー・バディヤーたちの活動

——ジェイラム・シヴジー、イヴジー・シヴジー、ラダー・ダムジー——

カッチー・バディヤーたちのマスカトにおける商業活動とは、主として異地域間を取り結ぶ交易活動であったと考えられている。もちろん、アフリカ大陸東部沿岸へ本格的に進出して以降も、彼らは自らの船舶を艤装していたし、内陸部へ自ら赴くことはなかったものの、内陸部との交易をおこなうキャラヴァンの重要な出資者の一角を占めていた⁽²⁶⁾。ただし、アフリカ大陸東部沿岸における彼らの活動は、必ずしも、そうした狭い意味での直接的な交易活動の枠内に留まるものではなかった。彼らの活動はきわめて多角的であり、しかもそれぞれの活動が相互に関連しあってもいた。そうした諸活動は、以下に述べるように、ネットワークの結節点である港町において、そこで集積・交換される多様なヒトやモノ、情報、カネを巧みに関連させたものであり、それは彼らの商業的な成功を生み、維持すると同時に、それらが集積される港町において、交換を整理し、潤滑にさせることで港町の発展にも大きく貢献をした。すなわち、彼らの商業活動の進展とネットワークの結節点としてのザンジバルの進展とは、少なくとも以下に考察するジェイラム、イヴジー、ラダーという3人のカッチー・バディヤーたちの活動をみる限り、軌を一にしていたと考えられる。以下では彼らのザンジバルにおける活動を、事例を示しつつ、分類し、諸活動間の相互関係を明らかにする。

1. 徴税請負職

彼らの多角的な商業活動のなかで、まず、挙げられるのが、港町における徴税請負職の獲得と独占である。港町を治める為政者が一定の金額と引き換えに一定期間の港における徴税の一切を現地の有力者に与えるという徴税請負職は、インド洋で古くから広範囲に亘って見られた。16世紀のマラッカにおける「シ

(26) Burton 1872, vol.1, 328.

ヤー・バンドル」の事例はとくに有名である。プー・サイード朝も早くからこの職位を採用しており、19世紀初頭にはマスカトの徴税請負職がバニヤン商人によって担われていたとされる⁽²⁷⁾。ザンジバルでも19世紀初頭から徴税請負職の存在が確認されている⁽²⁸⁾。

先行研究の多くが言及しているとおり、ザンジバルにおいては、通常、3年ないしは5年任期で、この職位は競売に掛けられていた⁽²⁹⁾。現地のイギリスやアメリカの領事館からの書簡や報告で“custom master”と表記されるこの職位は、アラビア語文献では“mustajjir al-furḍa (または al-bandar) wa-kabīr al-furḍa”⁽³⁰⁾、すなわち、「港の借地人および港の長」として表記されている。また、ティップー・ティプ Tippu Tip として知られるスワヒリ人商人ハメド・ビン・ムハンメド・エル＝ムルジェビ Hamed b. Muhammed el-Murjebi のスワヒリ語での口述筆記による自伝には、「税関の王 rai el forodha」という表現がみえる⁽³¹⁾。実際に、徴税請負職の落札者は、スルターンの一役人としてではなく、上に挙げたアラビア語、ないしはスワヒリ語の表現に相応な権力を港湾における諸事について行使していたと考えられる。たとえば、在ザンジバル・アメリカ領事の1837年5月6日付け書簡では、徴税請負人が徴税のみならず、荷

(27) Reda Bhacker 1992, 71-72. 1809年にマスカトを訪れ、その後、サイードに軍事司令官として仕えたマウリズィの記録にも、マスカトの税関が「裕福なバニヤン」によって管理されていることが記されている (Maurizi 1819, 29)。

(28) Nicholls 1971, 78; Sheriff 1987, 126. 両者はともに、ダロンズ Dallons の1804年の報告 (Freeman-Grenville 1962, 198) を典拠とする。それによれば、「マスカトに持つ富裕な財産によって王子 (スルターン) への忠誠を保証するバニヤンかアラブ」がこの職を任された。

(29) NAUS RG84/Zanzibar/100/n.p. [Waters to Forsyth, Zanzibar, 6 May 1837]; Bennett and Brooks (eds.) 1965, 355 [Ward to State Department, Zanzibar, 21 February 1846]; *Ibidem*, 381 [Ward to Buchanan, Zanzibar, 13 March 1847]. また、MAHA PD/1872/646/200/n.p. [Kirk to Wedderburn, Zanzibar, 9 December 1872] に添付のラダーの遺言 (ターリヤー・トパン Tāriyā Topan による代筆) の第2条にも、自らが5年の契約で徴税を請け負っている旨が記されている。

(30) MAHA PD/1841-1842/46-1261/316/n.p. [Norsworthy to Hamerton, Zanzibar, 28 Jun 1841; translation of a letter in English into Arabic]; *Ibidem*, n.p. [Hamartun to Sayyid Saʿīd, s.l., 8 Jumādā al-awwal 1257/28 June 1841].

(31) Whitely 1966, 28.

役人夫の手配を独占するなどしていたことが記されている⁽³²⁾。また、彼が出す指示や命令のなかには、1831年に締結された当時のブー・サイード朝スルターンであるサイード・ビン・スルターン Sa'īd b. Sulṭān とアメリカ合衆国とのあいだで結ばれた友好通商条約で保障されたアメリカ商人の権利を脅かすとアメリカ領事が危惧するものもあり、それに関してスルターンに苦情を申し出ても本質的な解決策が示されなかった⁽³³⁾。

ザンジバルにおいて、カッチー・パティヤーが徴税請負職に就いていたことを示すもっとも早い事例は、シェリフ A. Sheriff によれば、1820年代後半のアメリカ商人の文書のなかに見えるシヴジー・トパン Shivjī Topan（ジェイラムとイヴジーの父親）を徴税請負人として言及している記事である⁽³⁴⁾。その後、モンバサなどの大陸側の幾つかの港町でも同様の職位が設置されるようになっていくが、ジェイラムとイヴジーの代になると、カッチー・パティヤーたちはそれらの港町における徴税請負職も掌中に収めるようになっていった⁽³⁵⁾。ジェイラムとシヴジーが第一線を退き、ラダーがカッチー・パティヤーの商業活動の中核を担うようになる1850年代末には次のような状況が生じていた。

ラダー・ダームジーはザンジバルの税関を管理しているのだが、ペンバ島では彼の甥のピスー Pisú が同じ仕事をしている。モンバサはラクシュミダース Lakhmidas、それと同じ宗教を信仰する40人の手にあり、パンガニはトリカンダース Trikandas によって支配され、20人のパティヤーがいる〔中略〕活動的で知的な商人であるラムジーはバガモヨを統括し、キルワの関税はキシンドース Kishindas によって集められている。彼らのほ

(32) NAUS RG84/Zanzibar/100/n.p. [Waters to Froshth, Zanzibar, 6 May 1837].

(33) *Ibidem*.

(34) Sheriff 1987, 126. ただし、この説には、シェリフも註 (*Ibidem*, 152, n.15) で言及するように、異論が存在する。たとえば、ラダーが語ったとされる BPP (British Parliamentary Papers) British and Foreign State Papers, Zanzibar, p. 1087; 1877 (1871-1872 lxii) は、「ワット・ビマ Wat Bhima」として言及されるカッチー・パティヤーのビマーニー家がシヴジーたちに先立って徴税請負職を獲得していたとする。

(35) Sheriff 1987, 126-127.

とんどすべてが商売と同様に血で繋がっていることなど言うに及ばない⁽³⁶⁾。

徴税請負職の独占の過程の一方では、彼らとブー・サイド朝のスルターンとの個人的な紐帯の強化も進行していた。たとえば、1841年の徴税請負職の更新の際には、他の候補者がジェイラムよりも高い入札価格を出したにもかかわらず、サイド・ビン・スルターンはジェイラムに直接、再任の依頼をしている⁽³⁷⁾。また、これと同時期には、サイドが現地の商人たちを前にして、すべての商取引はジェイラムを介するようにと命令している⁽³⁸⁾。ティップー・ティプの自伝にも、彼が内陸部へのキャラヴァン交易からザンジバルに戻ってくると、ラダーから交易用の商品を調達するようにとサイドの後継スルターンであるマージド Mājid b. Saīd に強く勧められたことが記されている⁽³⁹⁾。こうしたスルターンとの紐帯は、商業的な関係ばかりに見られるのではなく、次のようなきわめて私的な関係においても確認される。たとえば、ジェイラムがカッチ地方へ帰郷する際に、スルターンの所有するスクナー船を利用したり、あるいは、1843年に深夜、何者かに襲われ大怪我を負ったジェイラムにスルターンが毎日、見舞いに訪れたりしていることが記録に残されている⁽⁴⁰⁾。

徴税請負職の独占とスルターンとの個人的な紐帯の強化とは、きわめて親和的であったと考えられる。なぜならば、カッチー・バティヤーにとって、この職位は自らの商売においてもっとも重要な場である港湾で強い権力を振るうことを許すものであったし、一方のスルターンにとっては、毎年払われる徴税請負職の請負料が最大の収入であったからである。すなわち、「税関の王」である彼らは、港に到着した積み荷に誰よりも早く手を付けられた⁽⁴¹⁾ことから、他

(36) Burton 1872, vol.1, 328-329.

(37) Bennett and Brooks (eds.) 1965, 232 [Waters to Waters, Zanzibar, 1 October 1841].

(38) MAHA PD/1841-1842/46-1261/316/120 [Norsworthy to Richard, Zanzibar, 12 September 1841].

(39) Whitely 1966, 28.

(40) Bennett and Brooks (eds.) 1965, 245 [Waters to Said bin Khalfan, Zanzibar, 1 July 1843]; *Ibidem*, 246 [Waters to Waters, Zanzibar, 2 September 1842].

(41) PPEM MH14/Box2 Folder3 [Waters to Parker, Zanzibar, 1 January 1840].

の商人よりも有利に商売を行えた。この特権は、彼らの個人交易に有利だけでなく、後述する欧米商人と現地商人とをとり結ぶ仲介業務においても、より一層の信頼を得ることにつながった。一方、スルターンの年間収入は、たとえば、1869年の場合、推定34万5千MT\$であり、このうちの約90パーセントに当たる31万MT\$が徴税請負料であった⁽⁴²⁾。したがって、スルターンにすれば、徴税請負料は命綱であり、より個人的に信頼をおける人物に職位を任せる必要があった。このように、徴税請負職の独占はスルターンとの個人的な紐帯の強化と同時に並行的に進められ、カッチー・バティヤーの個人的な貿易や欧米商人と現地商人とをとり結ぶ仲介業務にも大きな利点をもたらした。

2. 仲 介 業 務

彼らの持つ港湾における強大な権力と関連して、次に挙げられるのが、欧米商人と現地商人とをとり結ぶ仲介業務である。1840年当時のザンジバルにおける欧米商人のかかわる売買の具体的な描写が、ザンジバルにおける代表的なアメリカ商人であり、初代在ザンジバル・アメリカ領事も務めたウォーターズ R. P. Waters から別のアメリカ商人パーカー P. S. Parker へ送られた書簡に詳細に記されている。

あなたが船の商売〔の委託〕を約束したら、徴税請負人のジェイラム・シヴジー Jeram bin Seva と話しあいを持つとよいでしょう。船が何を売らなくてはならず、何を戻りの積み荷として求めているのかを彼に伝えなさい。ことをもっとも上手に進めるためには、彼に相談するのがよいのです。そうすると、彼は一度、私の家に商人を一同に呼び集め、綿布やその他の試供品を彼らに見せて、そして、それらの価格を定めるのです。〔中略〕ジェイラムはあなたが商品を配達し、それらを預けることのできる人物なのであって、彼こそはあなたが商売をするうえで知るべき唯一の人物なのです。〔中略〕売り契約を取りまとめる前に、あなたは戻りの積み荷とし

(42) BPP British and Foreign State Papers, Zanzibar, p.1086; 1877 (1871-1872 lxii).

て何が欲しいのか、そして、船が適切にその配達を待つことができる期限がいつまでなのかを彼に伝えなくてはなりません。ジェイラムはこれ以外には売買についていかなる利益も欲しないでしょう。彼は戻りの積み荷に関する契約を取り結んで、その代金を受け取って、通常は現地の商人たちに対して、船が戻りの積み荷を受け取るために停泊している間、それを信用貸しにします。象牙と綿布とは交換することができません。象牙は通常、正貨と交換されるからです。コーパル樹脂はジェイラムが綿布と交換するだろう商品です。別の商品のこともあります、それはコーパル樹脂と較べて彼がそうした商品からどれくらいの利益を得られるかによります。

[中略] 私が何かを売らなくてはならないときはまず、ジェイラムに当たることになっていますし、何かを購入したいときも同様です。[中略] もっとも、[ジェイラムよりも] 利益が上がるとわかった時は、私は他の商人と商売をしますが、ただ、それはよく考える必要があります。より安全でより迅速なのはジェイラムとの商売であって、ザンジバルのほかのあらゆる商人と較べてもそうです。船が主要な契約を取りまとめたのちに、船にまだそのほかの小さな商品が残っていたとしましょう。時計やらガラス製品やら、そういったものは小売商店主たちに売ることができます。ただし、よく注意して、配達のときに代金を受け取りなさい。そうすれば、信用貸しに関するリスクを負わなくて済みます。ただし、ジェイラムが保証人になってくれる人物であれば、たとえ[信用貸しをした結果、] その人物が約束を守らなくても、ジェイラムが責任を取ってくれると信用できます⁽⁴³⁾。

この引用から理解できる点をまとめると次のようになる。①ジェイラムが船舶の積み荷の売り手であるアメリカ商人と、買い手である現地商人とを引き合わせていたこと、②その場合、船舶の戻り荷については、ジェイラムがその調

(43) PPEM MH14/Box2 Folder3 [Waters to Parker, Zanzibar, 1 Jan 1840] (同一文書は、Bennett and Brooks (eds.) 1965, 224-226 にも収録)。類似の内容はより簡潔に *Ibidem*, 240 [Botsford to Webster, recd in Washington, 10 Nov 1842] にも記されている。

達を取り仕切っていたこと、③戻り荷の代金はジェイラムが前もって受領し、それを現地の商人たちに信用貸しにしていたこと、④差出人がジェイラムへの絶大な信頼を表明していること。

もちろん、上の引用を一般化して、ジェイラムをはじめとするカッチー・バディヤーたちがアメリカ商人との交易を独占していたとすることはできない。なぜならば、ウォーターズがこの書簡を書いた時期は、彼とジェイラムとの関係がもっとも緊密であった時期と重なっているからである。たとえば、1839年12月17日付で発信された彼の兄あての書簡によれば、ザンジバルにおける彼の取引の90パーセントがジェイラムとのものであった⁽⁴⁴⁾。また、1841年にザンジバルを拠点にしていたイギリス商人ノースワースイー R. B. Norsworthy は、ウォーターズとジェイラムがザンジバルにおける交易を独占し、ヴィクトリア女王とサイード・ビン・スルターンの名のもとに結ばれた通商条約の第10条⁽⁴⁵⁾に示された独占の禁止と交易の自由とが損なわれているとして、ボンベイの商工会議所に告発している⁽⁴⁶⁾。しかし、上に引用した書簡が書かれた2年後にセイラムのピングリー・ウエスト商会の代理人となったウォーターズは、一転して、ジェイラム以外にも商売相手を求めるようになっていった⁽⁴⁷⁾。このように目まぐるしく変転する同時期のザンジバルの商業活動に鑑みれば、上の引用内容を単純に一般化することはできないし、ジェイラムの弟であるイヴジーは、アメリカ商人の記録のなかでその人格がたびたび酷評されてもいた⁽⁴⁸⁾。

しかし、ジェイラムやイヴジーの商売相手がウォーターズだけでなかったこともまた、事実である。たとえば、1845年の5月半ばに、ジェイラムが別のアメリカ商人ベイツ W. B. Bates と仲介業務の契約を結び、戻り荷の購入に際して2パーセントの手数料を後者が前者に支払うことがベイツの日誌に記されて

(44) *Ibidem*, 223 [Waters to Waters, Zanzibar, 17 December 1839].

(45) Aitchson 1909, vol.13, 216.

(46) MAHA PD/1841-1842/46-1261/316/119-124 [Norsworthy to Richard, Zanzibar, 12 September 1841]. NAUK FO54/4/174-183 にも同一文書が収録。

(47) Sheriff 1987, 97-99.

(48) e.g. PPEM R. P. Water's Manuscripts 2 [Masiny to Waters, Zanzibar, 16 April 1845]; Bennett and Brooks (eds.) 1965, 340 [Fabens to Shepard, Zanzibar, 4 January 1845].

いる⁽⁴⁹⁾。また、ピーボディー・エセックス博物館附属フィリップス図書館 (PPEM) 所蔵のウェブ J. F. Webb による1851年から翌年にかけての日記には、ジェイラムがウェブやその他のアメリカ商人たちと商談ばかりでなく、会食や余暇を共に過ごす様子が頻繁に記されているし、ジェイラムが医者の手配やボンベイへの書簡の配達をアメリカ商人たちから任されていることも記されている⁽⁵⁰⁾。アメリカ商人の書簡からジェイラムらへの信頼や好感を示す言葉を探すのは難しくない⁽⁵¹⁾。また、欧米商人のなかには、ボンベイなどの他のインド洋西海域の港町での取引についてもカッチー・バティヤーたちに依頼する者がいたし、ジェイラムらも欧米商人の船舶に自らの商品の輸送を委託したり、彼らの伝手や情報を頼りにロンドンなどに販路を拡大しようとした⁽⁵²⁾。一部のアメリカ商人たちから嫌悪されていたイヴジーについても、ハンブルクの商会やアメリカ商人の別の一部が彼に仲介業務を請け負わせていたことを書簡から見て取ることができる⁽⁵³⁾。

このように、欧米商人への仲介業務は、双方のあいだに単なる取引相手という枠を超えた関係を築くこともあったし、そうして育まれた関係性を利用して、カッチー・バティヤーたちがロンドンなどにも販路を拡張させようとする動きもみられた。逆に欧米商人たちも、カッチー・バティヤーの商業網を見込んで、ボンベイなどでの商業活動における仲介業務を依頼することもあった。

(49) Bennett and Brooks (eds.) 1965, 266 [Journal and Observations, 8th Voyage, Brig *Richmond*, 1845].

(50) e.g. PPEM MSS 0.145 の1850年8月7日, 10月23日, 1851年4月16日の項。また, Browne 1968, 387-389 には, ジェイラムの英語による会話が記されており, 彼がある程度の英会話能力があったことが見て取れる。

(51) Bennett and Brooks (eds.) 1965, 410 [Ephraim A. Emmerton's Journal]; *Ibidem*, 452; [Jelly to Jackson, Zanzibar, 27 April 1851]; *Ibidem*, 476 [McMullan to Shepard, Zanzibar, 25 February 1851]; *Ibidem*, 482 [Ward to Shepard, Zanzibar, 3 January 1850]; *Ibidem*, 486 [Shepard to Webb, Zanzibar, 17 July 1851]. *Ibidem* [Shepard to Webb, Salem, 3 July 1851].

(52) PPEM MH14/Box1 Folder1 [Jeram bin Seva to R. P. Waters, Zanzibar, 20 May 1845]; PPEM MSS 0.145 の1850年10月18, 19日の項; PPEM MSS 104 (J. Bertram papers)/Box3 Folder1 [Web to Bertram, Zanzibar, 17 October 1868].

(53) Bennett and Brooks (eds.) 1965, 444 [Ward to Webb, Zanzibar, 14 June 1849]; *Ibidem*, 452 [Ward to Shepard, Zanzibar, 3 January 1850]; PPEM MSS104/Box3 Folder1 [Ropes to Bertram, Zanzibar, 14 August 1867].

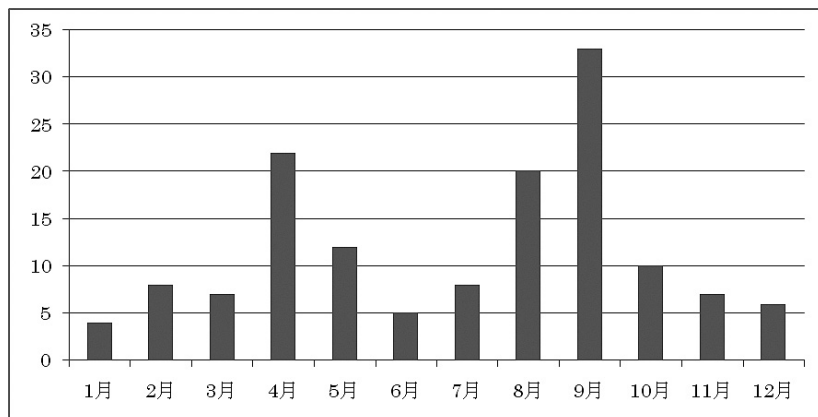
このようにして19世紀に入って本格的にザンジバル市場に登場した欧米商人は、カッチー・バティヤーがその取引の仲介を担うことで、効果的にザンジバルにおける交換の環の中に組み込まれた。カッチー・バティヤーが彼らの重要な仲介者となりえたのは、すでに説明した徴税請負職から派生するカッチー・バティヤーたちの港湾での優越に対する欧米商人の側からの信頼によるところが大きい。カッチー・バティヤーの仲介を伴う欧米商人のザンジバル市場への参入は、カッチー・バティヤー自身の個人的な交易にも益すると同時に、他の現地商人も巻き込んでのザンジバルの交易の活性化に貢献し、それは総じて関税収入の増加にもつながる。関税収入の増加は徴税請負職に多くの利益をもたらすことへと直結し、ひいては彼らがスルターンから徴税請負人としての信頼をより一層、獲得することにもつながる。さらに、仲介業務は、次に述べる金融業に関しても、その資金を獲得する有効なチャンネルとして機能していた。

3. 金 融 業

上に引用したウォーターズ書簡で言及されていた信用貸しを含む金融業への進出が、彼らの主要な活動の3つ目に挙げられる。先の引用にもあるように、アメリカ商人らから得た短期資金は、他の現地商人に貸与された。PPEM 所蔵の R. P. ウォーターズ文書に収められている1840年2月から1845年11月までの間にアメリカ商人とザンジバルの現地商人とのあいだで締結された142通の商業契約文書に見える契約締結日を表にすると表1のようになる。表1からは、1年のうちで8月から9月にかけて契約の締結が最も集中していることが分かる。この時期は、内陸からのキャラヴァンや海を渡ってやって来る交易船がザンジバルに集結する北東モンスーン期が始まる時期に当たる。これ以降、本格的な北東モンスーン期に突入すると、現地商人はザンジバルに到着する輸出品に関する精算業務に追われることになり、この時期に大量に流れ込むアメリカ商人からの短期資金はザンジバルにおける商繁期の取引一般における潤滑油として機能した。

カッチー・バティヤーの金融業の顧客は、現地商人だけに限らない。たとえば、1849年の在ザンジバル・イギリス領事の書簡には、「緊急時における現金

表1 アメリカ商人とザンジバルの現地商人とのあいだで結ばれた商業契約締結日



出典：PPEM MH14/Box 2 Folder 14

調達の最高で、唯一確実な方法は、イマーム⁵⁴⁾の徴税請負人から得ることである⁵⁵⁾と記されており、すでにこの時期には、少なくともカッチー・バティヤーたちの現金調達能力は現地商人以外にも知れ渡っていたことが示唆されている⁵⁶⁾。実際に、金融業における最大の顧客は、ザンジバルのスルターンであった。サイードの死去に伴うブー・サイード朝内部の領土分割を解決するために、オマーンのブー・サイード朝と合意したカニング裁定（1861年）で定めら

54) ここでの「イマーム」とは、ブー・サイード朝スルターンであるサイード・ビン・スルターンを指している。イバード派の影響力の強いオマーンに成立したブー・サイード朝は、初代のアフマド・ビン・サイードなど数名がイバード派の教義に則ってイマームに選出された歴史を持つが、彼自身はイバード派の教義に則ったイマームではない。イギリス側の文書や条約では、それにもかかわらず、「イマーム」の称号がブー・サイード朝君主に慣習的に用いられ、この王朝がザンジバルとオマーンとに分裂したことを確認したカニング裁定（1861年）までこの慣習は継続した。松尾はイマームの称号がイギリス側の文書で慣用的に用いられたことについて、イギリス側のイバード派の教義やブー・サイード朝の歴史に関する無理解とともに、この王朝の君主たちがこの慣用を黙認することによってイギリスからオマーン君主としての正統性を獲得することを期待していたと考えている（Matsuo 2003）。

55) ZZBA AA12/29/85 [Hamerton to the Chief Secretary to the Bombay Government, Zanzibar, 25 October 1849].

56) PPEM MSS 0.145の8月27日の項には、ウェブがジェイラムに「金の相談」をしていることが記されている。

れた毎年の貢納金の支払いもあり、マージドの代以降の財政は逼迫していた。マージドの後継スルターンであるバルガシュ Bargash b. Sa'īd の治世期になると、事態はより一層深刻化し、カッチー・バティヤーから相当額の融資を受けていた。たとえば、1876年の在ザンジバル・イギリス領事館からの報告書では、スルターンは徴税請負職を担っているジェイラム・シヴジーの商会⁵⁷⁾から、この年、徴税請負料として30万 MT\$ を受け取っているが、これはスルターンからこの商会への毎年の返済金24万 MT\$ を控除した額であると記されている⁵⁸⁾。

ただし、金融業への従事は、次のような事態ももたらした。ラダーが、ザンジバルに拠点を置くフレイザー商会という退役インド海軍⁵⁹⁾士官の興した商会に10万 MT\$ の融資をしたところ、この商会がそれを資本金にして、イギリス海軍に食用の牛肉を提供する商売を始めてしまった。カッチー・バティヤーは原則として肉食を一切しないことから、この融資は、大きな問題に発展した⁶⁰⁾。ラダーをはじめとするカッチー・バティヤーたちにとっては、結果的にとはいえ、精肉業に出資したことは非常に不名誉であり、ラダーは死の直前にも融資額の全額回収を周囲の人間に命じていた⁶¹⁾。

このように、カッチー・バティヤーの金融業は、現地商人から、ザンジバルで事業を興そうとするヨーロッパ人、さらにはスルターンまでもその顧客層に組み入れていた。彼らの金融資本は、自らの個人交易や徴税請負職からの利益

57) ジェイラムは1866年に死去しているが、彼の死後も「ジェイラム・シヴジーの商会」という語句がしばしば文書に登場する。1872年までは、ラダーがこの商会を率いていた。

58) *BPP Accounts and Papers, Correspondence with British Representatives and Agents Abroad, and Reports from Naval Officers relating to the Slave Trade*, p.58; 1876 (c1588) lxx, 327.

59) イギリス東インド会社は、1612年にスラトで東インド会社水軍 *East India Company's Marine* を設置し、その後、17世紀後半に当会社が拠点をボンベイに移転するに伴ってボンベイ水軍 *Bombay Marine* と改名された。これを前身として、1830年に改編されたのがインド海軍であり、王立海軍 *the Royal Navy* とは異なる組織である。インド海軍について最も優れたモノグラフとしては Low 1985 を参照せよ。

60) MAHA PD/1872/200/1054/19 [Kirk to Wellerborn, Zanzibar, 24 November 1871].

61) *Ibidem*.

で形成される一方で、仲介業務を介して欧米商人から得られた短期資本もそこで有効に機能していた。こうした資金は、内陸部へ向かうキャラヴァン交易に投資される一方で、交易の季節に短期で資金をやり繰りする必要のあるザンジバルの商人たちによっても利用されていた。このように、カッチー・バティヤーの金融業とは、ザンジバル交易にかかわる多様な主体を結びつけていたものであり、各々の資金繰りが潤滑になることで、ザンジバルの交易全体の活性化に一役買っていたのである。これが関税収入の増加にも結果的に結びついていたことは多言を要しない。これとともに見逃してはならないのが、カッチー・バティヤーの金融業がザンジバルの商業活動全体を円滑にする一方で、この活動を通して彼らがスルターンの財政の手綱を掌握することになっていた事実である。これによって、カッチー・バティヤーは為政者との関係をより一層深化させることができたのである。

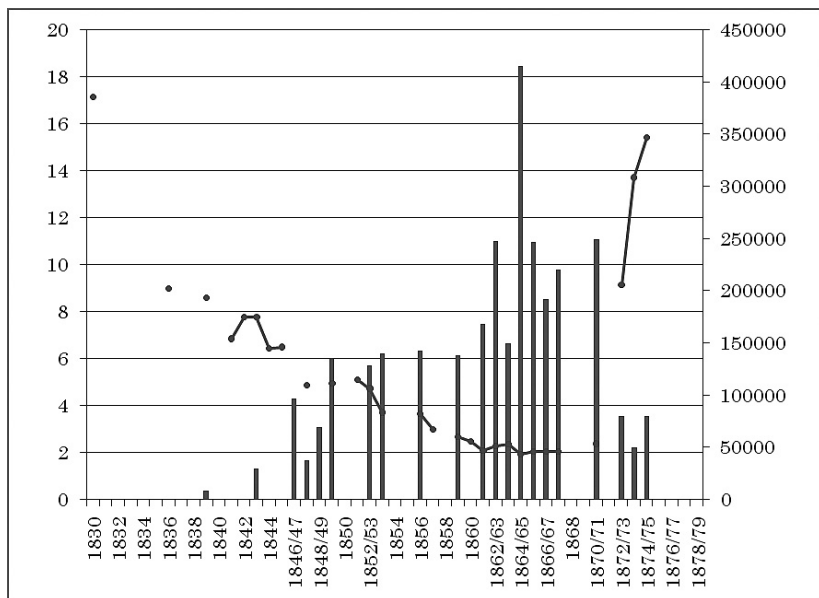
4. 農 園 経 営

1820年頃よりザンジバルでクローブなどのプランテーション栽培が本格化するようにになると、信用貸しの抵当にプランテーションが宛がわれるようになっていった⁶²⁾。主としてアラブ系の人々によってプランテーションが所有されたクローヴの生産は、1840年代から1850年代半ば頃までは利潤も高かったが、シェリフによれば⁶³⁾、次のような事情から、利潤が下がっていった。すなわち、彼は19世紀末のイギリス人植民地官僚の言及に基づき、クローヴ生産はクローヴ樹100本当たり10人程度の労働力を利用するのが適当とみなし、そのうえで、1本当たりの乾燥クローヴの年間生産量は6重量パウンド程度と考える。これに従えば、奴隷1人当たり年間60重量パウンドの生産量が期待できる。この推定にクローヴ価格を加味すると、クローヴ1フラセラ *frasela* (≒35lbs) が10MT\$ していた1830年当時だと、奴隷1人の生産高は年間17MT\$ だが、その後、1859年にはクローヴ価格が1.56MT\$/フラセラに落ち込んでしまった(表

⁶²⁾ ZZBA AA12/29/64 [Hamerton to Secretary to Bombay Government, Zanzibar, 9 December 1842].

⁶³⁾ Sheriff 1987, 64-65.

表2 ザンジバル・ペンバ島におけるクロヴ生産量と奴隷1人当たりの生産量



奴隷一人当たりの生産高：赤点・左軸（MT\$），両島における総生産量：青棒・右軸（フラセラ）
 出典：Sheriff 1987, 62-63, table 2-3に基づき筆者作成

2)。そうなると、奴隷1人当たりの生産高は年間2.67MT\$となり、クロヴ・プランテーション経営は利潤の低いものになっていった。こうした事情で、借主が返済不能に陥りやすくなり、当然、抵当として宛がわれた借主の所有するクロヴやココヤシのプランテーション農園は、貸主の手に渡って行った。こうして獲得した農園の経営が最後に指摘すべき点である。ザンジバルでは、プランテーション農園を最初に獲得したインド系住民として、イヴジーの名前を現在でも耳にすることができる。

カッチー・バティヤーたちが所有していたプランテーションの面積やそこにおける農作物の生産高を明らかにすることはできないが、たとえば、1860年に作成された解放奴隷のリストによれば、455名の奴隷がラダーの所有下にあった⁶⁴⁾。たしかにプランテーション経営の利益が低くなったことは事実であるが、

⁶⁴⁾ ZZBA AA12/3 “List of Slaves unlawfully held in slavery by British Indian

プランテーションで生産されるクローヴやココヤシがザンジバルの主力輸出品であったことに鑑みれば、自らがプランテーションを所有することで、彼らの個人交易において、安定的にそれらの主力商品を取引相手に提供することが可能となった。これは、クローヴやココヤシ製品を所望する欧米商人たちからの一層の信頼を得ることにつながり、それはひいては関税収入の増加にも寄与したのである。

以上のように、ザンジバルを中心とするカッチー・バティヤーたちの活動は狭義の交易商人という枠に収まりきるものではなく、むしろ、その商業活動は、ブー・サイード朝のスルターンと堅く結びつき、また、総合商社とでも呼ぶべき多角性を有していた。以上に述べてきた彼らの多角的な活動とそれら相互の結びつきは、図1のように図示できるだろう。

Ⅲ ま と め

本稿では、インド洋西海域世界のネットワークの結節点としての港町の実態を具体的に把握する試みとして、また、そうした港町において頻繁に欧語文献で言及される「バニヤン」商人の実態を解明する試みとして、19世紀のザンジバルを中心とするカッチー・バティヤーの活動を考察した。

18世紀末からのカッチ地方における自然災害の頻発と政治的情勢の不安定化のなかで、海外に商機を求めていった彼らは、やがてザンジバルを中心とするアフリカ大陸東部沿岸に活動の拠点を築いていく。ザンジバルを中心とする彼らの商業活動の考察から浮かび上がって来たのは、カッチー・バティヤーたちが「交易商人」という語から連想されるような直接的な取引のみを行っていたのではなく、多様な商業活動を展開していた姿である。

彼らの諸々の商業活動は、相互に関連しあっていた。たとえば、徴税請負職は直接的にはスルターンと彼らとのあいだの契約関係であったが、その立場を活かして、欧米商人への仲介業務を担うと、そこで自らも仕事を請け負うとともに、そこで得られた短期の資金を、自己の交易資金として運用するのに加えて、ザンジバルにおける交易の季節に短期資金を必要とする現地商人たちにも

供給した。また、彼らの金融業は、現地の商人を対象とした短期資金を提供するばかりでなく、ザンジバルで事業を興そうとする欧米人やスルターンをもその顧客に取り込んだ。ザンジバルやベンバでプランテーション栽培が興隆すると、プランテーションが融資の担保にされるようになるが、資金の回収が不可能になると、彼らはその担保を手にした。そのような経緯で手にしたプランテーションで生産される商品作物は、たとえ時代の変化によってその価格が下落したとしても、販路を有する彼らにとっては、個人取引に貢献しえた。彼らの取引相手は欧米商人だけではなかったが、たとえば、そうした商品作物を求める欧米商人に安定的に商品を納入することは、彼らとの信頼関係を構築し、高まる信頼は、彼らの仲介業務に益した。このようにして、ザンジバル全体の取引が活性化すれば、それは関税収入の増加にもつながっていく。安定した徴税請負料の支払いはスルターンへの貸付金とともに、彼らとスルターンとの関係をより深めていった。このように各事業が相互に関連しあい、モノやカネ、情報、そして信頼がそれぞれの事業のあいだで往来することで、カッチー・バティヤーたちはザンジバルを中心としたアフリカ大陸東部沿岸での商業的な成功を築いていったのである。

ネットワークの結節点として港町を捉えれば、以上の点は次のように言いかえられるだろう。すなわち、相互関連するカッチー・バティヤーの商業活動は、それぞれのセクターを窓口として、港町で交錯する様々な人間集団をつなぎ合せていた。たとえば、アメリカ商人のもたらす短期的な資金は、カッチー・バティヤーというチャンネルを通して、アメリカ商人と直接的な関係を持たない内陸部へ向かうキャラヴァンの資金にも、あるいは現地の商人たちにとっての短期的に運用できる資金にもなった。また、短期資金の返済ができない現地商人のプランテーションは、カッチー・バティヤーの手に渡り、そこでの生産物は、欧米商人との取引にも活用された。このようにして、ザンジバルの市場では、多種多様なヒト・モノ・情報・カネそして信頼がカッチー・バティヤーの活動を媒介にしてつながりあい、循環していたのである。

文書館略号

- MAHA (Maharashtra State Archives, Maharashtra, Mumbai, India)
 NAUK (National Archives, Kew, U.K.)
 NAUS (National Archives, College Park, MD, U.S.A.)
 PPEM (Philips Library, Peabody and Essex Museum, Salem, MA, U.S.A.)
 ZZBA (Zanzibar National Archives, Zanzibar, Tanzania)

参考文献

- Aitchson, C. U. 1909: *A Collection of Treaties, Engagements and Sanad: Relating to India and Neighbouring Countries*, 13vols. Calcutta (1st. ed. 1862-1866, in 8vols).
- Allen, C. H. 1978: *Sayyids, Shets and Sultāns: Politics and Trade in Masqat under the Āl Bū Sa'īd, 1785-1914*, Ph.D Dissertation, University of Washington.
- Alpers, E. A. 2009: *East Africa and the Indian Ocean*. Princeton.
- Bennett, N. R. and G. E. Brooks (eds.) 1965: *New England Merchants in Africa: A History through Documents 1802 to 1865*. Boston.
- Browne, J. R. 1968: *Etchings of A Whaling Cruise*. Cambridge.
- Burnes, J. 2004: *A Sketch of the History of Cutch*. New Delhi (1st. 1839).
- Burton, R. 1872: *Zanzibar; City, Island, and Coast*, 2vols. London.
- Campbell, J. M. (ed.) 1880: *Gazetteer of the Bombay Presidency, vol. 5: Cutch, Palanpur, Mahi Kantha*. Bombay.
- Coupland, R. 1967: *The Exploitation of East Africa 1856-1890: The Slave Trade and the Scramble*. s.l. (North Western University Press).
- Dulerāy Kārānī 1990: *Kachchh karāghar*, 2vols. Rājkot.
- Elliot, H. M. 1966: *The History of India, as told by its own historians: the Muhammadan Period*, ed. by J. Dowson, 8vols. New York (1st London, 1867-1877).
- Enthoven, R. E. 1922: *The Tribes and Castes of Bombay*, 3vols. Bombay.
- Freeman-Grenville, G. S. P. 1962: *The East African Coast: Selected Documents from the First to the Earlier Nineteenth Century*. Oxford.
- Hall, K. R. (ed.) 2008: *Secondary Cities and Urban Networking in the Indian Ocean Realm, c.1400-1800*. Plymouth.
- Haneda, M. (ed.) 2009: *Asian Port Cities 1600-1800: Local and Foreign Cultural Interactions*. Singapore.
- 弘末雅士 2004: 『東南アジアの港市世界——地域社会の形成と世界秩序——』, 岩波書店.
- Koga, M. (ed.) 1991: *South Asian Community Organisations in East Africa, the*

- United Kingdom, Canada and India*. Tokyo.
- Low, C. R. 1985: *History of the Indian Navy 1613-1863*, 2vols. New Delhi (1st. ed. London, 1877).
- Madan, A. C. 1903: *Swahili-English Dictionary*. Oxford.
- Markovits, C. 2008: *Merchants, Traders, Entrepreneurs: Indian Business in the Colonial Era*. Ranikhet.
- Matsuo, M. 2003: "A Study of Titles of Rulers of the Āl Bū Sa'īd Dynasty: Britain's 19th Century Legitimization of Oman's Dynastic History." *Japan Association for Middle East Studies* 19-1: 153-174.
- Maurizi, V. 1819: *History of Seyd Said, Sultan of Muscat; together with an Account of the Countries and People on the Shores of the Persian Gulf, particularly of the Wahabees*. London.
- McMurdo, J. 1820: "An Account of the Province of Cutch, and of the Countries lying between Guzerat and the River Indus: With Cursory Remarks on the Inhabitants, their History, Manners, and State of Society." *Transactions of the Literary Society of Bombay* 2, 217-218.
- 2007: *McMurdo's Account of Sind, Introduction by Sarah Ansari*. Karachi.
- Mehta, M. 1991: *Indian Merchants and Entrepreneurs in Historical Perspective*. Delhi.
- 桃木至朗(編) 2008:『海域アジア史研究入門』, 岩波書店.
- Nicolini, B. 2004: *Makran, Oman and Zanzibar: Three-Terminal Cultural Corridor in the Western Indian Ocean (1799-1856)*. Leiden and Boston.
- Nicholls, C. N. 1971: *The Swahili Coast: Politics, Diplomacy and Trade on the East African Littoral, 1798-1856*. London.
- ピアスン, M. N. 1984:『ポルトガルとインド——中世グジャラートの商人と支配者』, 岩波書店.
- Postans, M. 1839: *Cutch; or, Random Sketches, taken during a Residence in One of the Northern Provinces of Western India; Interspersed with Legends and Traditions*. London.
- Reda Bhacker, M. 1992: *Trade and Empire in Muscat and Zanzibar: Roots of British Domination*. London and New York.
- 歴史学研究会(編) 2006:『シリーズ港町の世界史』全3巻, 青木書店.
- Salvadori, C. 1989: *Through Open Doors: A View of Asian Cultures in Kenya*, ed. by A. Fedders. Nairobi (2nd; 1st. 1983).
- Sheriff, A. 1987: *Slaves, Spices and Ivory in Zanzibar*. Oxford.
- Steere, E. 1930: *A Handbook of the Swahili Language as spoken at Zanzibar: Edited for the Universities' Mission to Central Africa*, revised and enlarged by A. C.

- Madan. London (3rd; 1st. 1884).
- Suzuki, H. 2012: "Enslaved Population and Indian Owners along the East African Coast: Exploring the Rigby Manumission List, 1860-1861." *History in Africa* 39, 209-240.
- 鈴木英明 2008a: 「インド洋海域世界のなかのカッチ地方」『シルクロード学研究』30, 5-20.
- 2008b: 「インド洋世界におけるカッチーバティヤー・コミュニティの活動」『シルクロード学研究』30, 21-25.
- 2010 「19世紀インド洋西海域世界と『近代』: 奴隷流通に携わる人々の変容」東京大学人文社会系研究科に提出された博士論文.
- Swali, K. 2003: "Bhatias in East Africa: with special reference to 'Bwana Jeyram' and the 'Sultan of Zanzibar'." paper presented at the 1st Vishv Bhatia Sammelan, 24-27 July 2003, Dar es Salaam.
- Whitely, W. H. 1966: *Maisha ya Hamed bin Muhammed el Murjebi yaani Tippu Tip kwa maneno yake mwenyewe*. Nairobi.
- Wilkinson, J. C. 1987: *The Imamate Tradition of Oman*. Cambridge.
- 家島彦一 1996: 「インド洋海域世界の観点から」川勝平太(編)『海から見た歴史——ブローデル「地中海」を読む——』, 藤原書店, 124-143.
- 2006: 『海域から見た歴史——インド洋と地中海を結ぶ交流史——』, 名古屋大学出版会.
- Yule, H. and A. C. Burnell 1886: *Hobson-Jobson: A Glossary of Anglo-Indian Words or Phrases and of Kindred Terms Etymological, Historical Geographical and Discursive*. Bombay.

[謝 辞]

本論文は、2010年に東京大学人文社会研究科に提出した学位請求論文の一部を大幅に書き改めたものである。書き改めるにあたっては、2011年10月1日に開催された日本南アジア学会第24回全国大会での企画セッション“Migration History around the Indian Ocean World since the Seventeenth Century”(代表者 秋田茂大阪大学教授)と2012年2月11日に開催された「近代アジアにおける植民地都市と商業・金融・情報ネットワーク」(平成22年度から24年度科学研究費補助金・基盤研究(B) 研究代表 脇村孝平大阪市立大学教授)での報告とそれに対する参加者のコメントが参考になった。各代表者と参加者にここに謝意を表する。

marks by Chinese firms and reevaluates the policy of protecting foreign trademarks by the Beijing government. However, this at the same time resulted in the strengthening of reaction of Chinese firms against the Beijing government. This was because they were attempting to legitimize the production and sales of imitation products with trademarks of foreign firms under the slogans of “reviving national products” and “retrieving rights”.

Therefore, a trademark law was established as a diplomatic promise based on the conclusion of the treaty, but if it was observed, opposition from domestic firms could not be avoided, and the Peking government was thrown into a difficult position regarding trademark protection. Likewise, the Nanjing government, which overthrew the Beijing government, was also unable to overcome these conflicting demands.

NETWORKS OF PORT TOWNS AND THE SO-CALLED “BANIYAN MERCHANTS”: THE ACTIVITIES OF KACHCHHĪ BHATIYĀ MERCHANTS IN 19TH-CENTURY ZANZIBAR

SUZUKI Hideaki

By focusing on the activities of the Kachchhī Bhatiyā merchants in 19th-century Zanzibar, this article grapples with two important issues in the history of the Indian Ocean world that have not received sufficient concrete consideration. One neglected issue is, on the assumption that port towns are understood as places of accumulation and exchange of multiple varieties of people, goods, information, and money, how did the towns organize these multiple flows. The second issue is the “Baniyan merchants” who frequently appear in Western sources that comment on the port towns of the western Indian Ocean. These two issues form the two sides of a single problem in 19th-century Zanzibar. This article focuses on the commercial activities of the Kachchhī Bhatiyā who were particularly influential among the “Baniyan” merchants of 19th-century Zanzibar in an attempt to clarify these two issues. The following points have been elucidated on the bases of these considerations. In short, their activities cannot be delimited within a strict definition of commercial traders. Instead, their commercial activities were firmly

linked to the sultans of the Al Bu Said dynasty, and in addition they were multifaceted enough to merit being called general trading companies. Moreover, each of their spheres of activity was organically unified in such a manner as not only to support each sphere, but they, for example, used middlemen to acquire funds on a short-term basis from Western merchants, transfer those funds to their sphere of financial operations, and employ those funds for commercial activities of local merchants, and they could be linked through the channel of the Kachchhī Bhatiyā to the many varieties of people who assembled in the port towns of Zanzibar without having mutual direct contact with one another. Furthermore, what circulated in each sphere was not limited to goods and money; for example, tax farmers strengthened their relationship of trust with the sultan and that relation of trust spread to have a positive effect on their operations as middlemen with Western merchants, and this trust also became an important factor along with goods and money.